

年間第5主日 マタイ5：13～16

朗読されたたとえ話は、山上の説教の始めの部分です。特別な教養があるわけでない純粋で素朴な人たちに語りかけています。内容を見ていきましょう。

塩には、様々な大切な役割があります。「塩漬け」という言葉がありますが、腐りやすいモノを保存する役目があります。食べ物から栄養分を体に吸収する役割があります。野菜や、肉、魚がどんなにたくさんあっても、塩がなければ栄養分を体に吸収できません。塩がないと人間は生きていきません。塩の役割を果たすものは、他にはありません。だから、戦後長い間、塩だけは専売にして安い価格で人々が買えるようにしていました。

イエス様の時代は、塩は純度の低い岩塩でした。壺の中に長い間入れておくと、変質して土のようになってしまいました。塩が塩でなくなってしまう、貴重だったものが価値のないものになってしまう。役に立たないものは、捨てられてしまうしかありませんでした。

「あなたがたは“世の(ギリシア語のコスモス：宇宙とも訳せます)” “光”である。」 「世の」というのは、生きている世界のことです。人間生活は、モノと関わるか(生産と消費：作るか使うか)、ヒトと関わるか(人間関係・社会生活)のどちらかです。モノと関わることも大事ですが、ヒトと関わる方がより大切です。関わりには、家族・友人・職場・国同士などがあります。

「光」がなければ「闇」になってしまいます。「光」があると「世の中」は一変します。物理学的な「光」も大切ですが、人間同士の「光」も大切です。

私たちは「世」に生きていますが、貴重な役目(塩の役割)もすれば、意味のないもの(ただの土)になってしまう可能性があります。「光」になれることもあれば「闇」の中で輝けないこともあります。

繰り返しになりますが、イエス様がこのたとえ話を語ったのは、山上の説教の初め、集まった人たちは、特別なエリートだったわけではありません。それなのに「あなたがたこそ、地の塩、世の光である」と言われます。「地の塩、世の光となれ」ではなく「である」と言われています。

これはどういうことなのか？ 私は考えました。大した能力がないのに「地の塩、世の光である」とはどういうことなのでしょう？

考えた結論は「人目を引くか？」「どれだけできるか？」はさほど大事ではない、ということです。これは確かに魅力的ですが、イエス様はその視点では語ってないと思います。なぜなら、集まった人たちはエリートではなかったからです。特別なものはないけど、イエス様の話を聞きに来る、イエス様の教えこそ大切だ、希望を与えてくれる、力を与えてくれる、励まされる、そういう感覚を持つことが「地の塩、世の光である」ということなのでしょう。

それは、考え方や行いにも影響を与えるはずですが。周りからは見向きもされないことを一生懸命できたり、それを何年・何十年も続けられたりします。たとえ「立派だ」と認められないことでも、「大切だ」と思うことを自分で選んで行動します。人目に触れなくても執念深く続けます。「忍耐」「継続」「望み」「憧れ」を持ち続けます。

一方「塩気がない」「光になれない」とは「諦め」「無関心」「絶望」に陥ります。これらのことは「能力」の問題ではありません。

もうすぐ、園長をして4年になります。私のしてきたことは、決して「特別なこと」ではありません。一緒に遊んだり、お弁当を食べたりして、その時のことを保護者にも伝えてきました。その

うちに、いつの間にか「親しみやすい園長先生」「楽しい園長先生」「安心できる園長先生」になってきたように思います。「特別の能力(学問)があること」が効果を生んだわけではないでしょう。私たちの生活でも、同じことが言えるでしょう。イエス様は「あなたがたこそ、地の塩、世の光である」と言われています。その意味を捉え直して、実際に役割を果たしていきましょう。